

長野県埋蔵文化財センター

No. 19

1987.1.30

(財)長野県埋蔵文化財センター

松塩筑調査事務所
〒399-07 塩尻市広丘高出1977
TEL 0263-54-2150



女性像線刻画・美濃国刻印・庄名記載の墨書土器など

松本平の発掘調査がほぼ終了し、現在整理作業が進行しているが、その過程で新たに発見された遺物のうち、2、3を紹介してみたい。

〔女性像線刻画〕 三の宮遺跡でも最も遺構が密集した地域にある128号住居址覆土から出土、須恵器高台杯の内部底面に線刻されており、下半身を欠くのが惜しまれる。同一面に記号か文字らしい線刻もある。平安時代前半のもので、県下は勿論、全国的にも珍しい出土例といえよう。

〔美濃国刻印ある須恵器〕 南栗遺跡でも奈良時代の遺構の多い地区の625号住居址から出土。立派な石組みカマド以外に特色のない一般的な住居である。美濃須衛窯産の杯蓋の内面中央に押捺されている。県下では南信飯田市恒川遺跡に類例があるのみで、流通面からの究明が課題となろう。

〔墨書土器〕 水洗・注記が進んで新しく発見され

る例も少なくない。吉田川西遺跡出土の「縣」は「寺」など墨書土器の多い144号住居址から出土した。緑釉陶器7点一括出土、良質の輸入陶磁器など、この遺跡の性格を暗示する文字といえよう。平安中期の黒色土器杯の外面に書かれている。県下でも初見。

下神遺跡の「草茂」は現在まで5点出土。大型住居址を中心とした付近に多い傾向がある。平安前期頃の『多武峯略記』仁和3年4月13日の条に「信濃国筑摩郡蘇我郷字草茂庄云々」の記事がある。一志茂樹博士らによってその地は鳥居峠以南から塩尻市洗馬・宗賀付近までと比定されている。下神遺跡はむしろ北にある「大井郷」地域に属するとされているので論議がところ。ちなみに「大井」の刻書土器が、同じく北に連なる「高家郷」比定の松本市北方遺跡（松本市教委調査分）から出土しているのも興味深い。平安前期の須恵器杯底部に墨書されている。



昭和61年度発掘調査速報

南栗遺跡上空からみた北にのびる中央道長野線

松本市西部地区に多数の古代・中世集落

—住居址766軒・建物址280棟など—

昭和60年度に引きつづき、松本市西郊を北進する中央自動車道長野線の松本市と南安曇郡豊科町区域の遺跡発掘調査は、61年12月をもって一部分を除きほぼ終了した。そこで61年度の主要調査地域となった松本市島立地区3、同島内地区2、豊科地区1の計6遺跡について、まだ整理段階に入ったばかりであるが、その概要を速報として発表したい。

わけでも、松本市島立地区3.6 kmのうち、南から南栗・北栗・三の宮遺跡は約2.2 kmにわたって連続して遺構が検出された。調査総面積は、合計約132,000 m²に達し、検出された主な遺構は、古墳時代から中世に及ぶが、住居址766軒、掘立柱建物址280棟、竪穴状遺構・溝址・柵列・墓墳・土壇等約5500基という膨大な数字となった。この地域の一部、北栗から三の宮遺跡にかけては、「新村・島立条里」地域として古くから文献史学側から注目され、一昨年9月には郷土史誌『信濃』にその特集号が掲載されたほどである。地上からの観察・分析を主としたこの特集号の成果に対し、今回の調査結果がどのような意義をもつか今後の課題となろう。

こうした「条里」との関係もさることながら、3遺跡から検出された遺構・遺物のみ取り上げても古代(中世)集落研究に大きな役割を果たす多くの課題が内蔵されており、同時に調査した鎖川を距てた松本市下神遺跡や同一地形上に展開する北方遺跡、また特殊な遺物を多出して注目された吉田川西遺跡など、特に平安時代を主とした古代から中世への集落址研究に優れた資料を提示することになるであろう。なお佐久地区の今年度調査終了部分のみも速報しておきたい。

みなみぐり
松本市 南栗遺跡

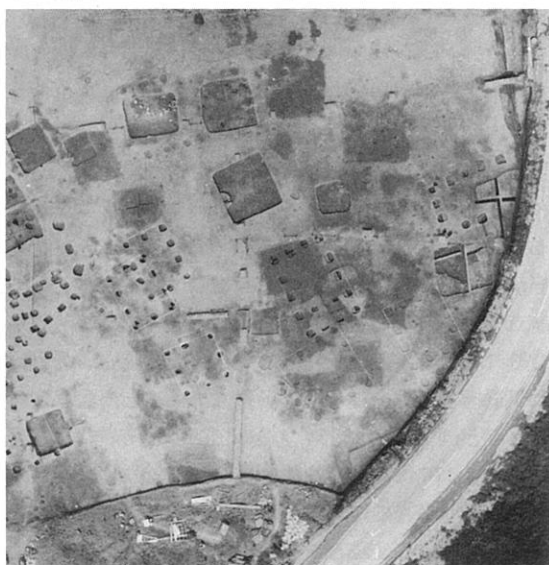
調査研究員 市村 勝巳

本遺跡は松本市島立地籍に所在し、鎖川と奈良井川合流地点に近い奈良井川左岸の自然堤防上に位置する。今回の調査区に隣接する周辺地域は、県営は場整備事業に先立ち、松本市教育委員会によって調査され、奈良時代から中世に至る遺構や佐波理碗等の遺物が発掘され、南栗遺跡の範囲が広範囲にわたることが報告されている。

調査は昨年の7月に開始され、本年の11月25日をもって終了した。調査は約35,000㎡を対象とし、確認された遺構は古墳時代終末期から中世に属し、竪穴住居址337軒、掘立柱建物址106棟、土壌約1000基にのぼり、他に柵列、溝址等がある。これらは当初の予想をはるかに上回るものとなり、県内有数の大集落遺跡であることが確認された。

現在、整理が開始されたばかりで、その上遺構相互の重複関係が著しく多かったため、全ての遺構の時期を確定できない段階にある。詳細については今後に待たねばならないが、現在の所見をもとに遺跡の概要と整理の課題について若干述べてみたい。

まず遺構についてみると、古墳時代には約20軒の住居址とそれに数棟の掘立柱建物址が伴う。遺構は集中する地点が1カ所あり、そこを中心に分布する(写真)。奈良時代になるとそれぞれ若干増加する傾向をみせ、



南栗遺跡の古墳時代末～奈良時代の掘立柱建物址と住居址群

住居址は大型化する。分布は遺跡全体に万遍なくみられるようになり、平安時代に入るとこの様相は一変する。灰釉陶器の出現を境に前半と後半に区分すると、前半は約100軒、後半は約150軒の竪穴住居址がある。集落は数カ所に拡散し、同時に拡大する傾向が観察され、断定はできないものの、同じ場所で少しずつ移動しながら住居の建て替えを繰り返す様相が窺える。

この遺構群のなかで、45棟の掘立柱建物址と41軒の竪穴住居址が集中する地点は注目できる(写真)。掘立柱の約30棟は奈良時代に属し、一部は古墳時代に溯る。3間×5間の廂付の南北棟など規模は多種にわたり、竪穴住居址を含めたこの一群が南栗遺跡を特徴づけるものとして特筆される。

なお、中世に属する遺構として内耳土器を出土した土壌が散発的ではあるが確認されている。

遺物はTEN箱で約550箱と多く、八稜鏡、金環、銀環、佐波理碗等特殊遺物も少なくないが、何よりも庶民の使用した土師器、須恵器、灰釉陶器などが、古墳時代から平安時代中頃まで連続的に出土しており、当時の食器の変遷を知る上での好資料となろう。

最後に今後の課題について若干整理しておく。

第1に、集落の構造についてである。時間的に連続する集落の変遷過程とそこにある社会的背景の問題、また、島立条里という計画的開発地帯のなかで松本平でも最大級の集落遺跡であろう本遺跡がどんな関連性をもったのか、併せて分析されなければなるまい。

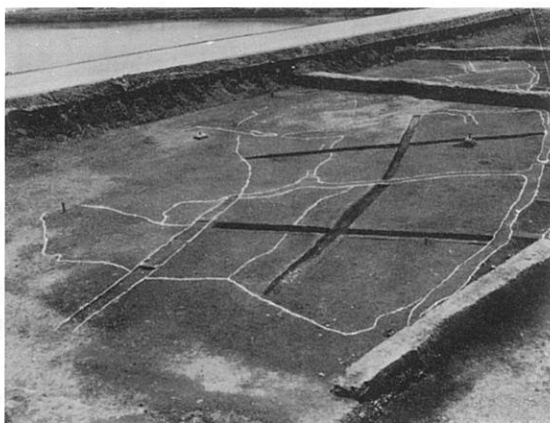
第2に、遺構についてである。カマドを例に挙げてみてもその構築法、廃棄のパターン、上屋構造との関連など様々な分析の視点があり、同様に掘立柱建物や竪穴住居の構造などについてもその変遷を中心とした分析が課題となる。

さらに、自然環境の変化と集落の関係、生産域と生産形態の問題など多岐に亘る課題があるが、本遺跡は北栗、三の宮遺跡と途切れることなく連続しており、それらとの関連から総合的な分析をすることが重要な課題となろう。

きたぐり
松本市 北栗遺跡

調査研究員 百瀬 新治

北栗遺跡は、松本市街から奈良井川をはさんで西側にのぞむ島立遺跡群のなかに位置する。遺跡範囲は島立条里の南限線と想定されている市道高綱7号線を中心に、一辺1km程と考えられる。その西側部分を中央



北栗遺跡検出の水田址

自動車道長野線が南北に縦断して建設されている。

埋文センターにおける本遺跡発掘調査は、昭和60年9月より61年9月まで、ほぼ1年の間実施された。道路用地内全域が遺跡範囲であり、調査対象面積54,000㎡を完掘した。調査の結果、縄文時代中期から、弥生・古墳・奈良・平安時代、さらに中世、近世にまで続く複合遺跡であることが明らかになった。そのなかでも、特に奈良、平安時代から中世にかけての遺構が数多く検出されている。検出遺構としては、竪穴住居址253軒、掘立柱建物址93棟、いわゆる竪穴状遺構を含む土壇1,800余基をはじめ、溝、柵列、水田址等多種にわたり、数も多い。

以下、時期を追って調査の概要を述べる。

縄文時代中期から後期にかけての土器片が少量ながら出土している。土器片の出土した層位は、奈良・平安時代の遺構検出面からはさらに下位である。また、土器片とともに、焼土、炭化物も出土し、不整形の落ち込みらしきものも認められた。しかし、小範囲の広がりであり、遺構の存否などは明確にならなかった。

調査区の南端から弥生時代後期の竪穴住居址が1軒検出されている。床面近くまで耕作による削平が及んでいるが、平面形は隅丸方形であり、埋甕炉をもつ。弥生時代に属する遺構は本住居址のみである。

古墳時代の住居址が、調査区の南側部分で数軒検出されている。引き続いて同一地点に奈良時代から平安時代にかけても住居址が構築されるため、調査区内では最も住居址の切り合いの激しい場所となった。その他の場所では、古墳時代の遺構は確認されていない。

奈良・平安時代になると、住居址、建物址等の遺構が調査範囲内ほぼ全域から検出されてくる。遺構の分布の濃淡からみると、いくつかのまとまり（集落）が存在するように思える。また、それぞれのまとまりは、

時間の経過とともに、場所を移しながら構築されている場合が多い。さらに、遺構のほとんど存在しない地域が見られる。地形の復元から、当時はこの地がやや低地であった部分と考えられる。さらに北端では、ほぼ同時期に営まれたと認められる水田址(写真)が確認できた。これらは生産域と居住域との関係で注目される。

中・近世の諸遺構は、高綱線を中心に調査区の中央部分に展開する。竪穴状遺構を伴う掘立柱建物址が20棟以上検出された。大小の規模のこれら建物址は、2～3棟でグループを構成しているようである。この建物群を区画するように溝址が配される部分もある。また墓墳を含む土壇群が2カ所で密集して検出された。これらの遺構は、3時期ぐらいに大きく分けられそうであるが、各遺構の帰属時期は今のところ明確になっていない。また、現水田を細区画した状態の水田址も検出された。

以上概括してきたが、現時点における課題を簡単に記したい。

奈良・平安時代から中世にかけて広く展開をみせている集落の構造及び変遷を、時期を追いながら明確にする必要がある。さらに、周辺の遺跡や生産域を含めて遺跡の景観復元をしていく事もあろう。次に、中世の諸遺構の性格を明らかにしつつ、現条里景観の成立時期や背景を明確にすることも含めて、当地域の現在につながる開発の歴史をとらえねばならない。

松本市 三の宮遺跡

調査研究員 望月 映

松本市島立地籍に所在する三の宮遺跡は、梓川と奈良井川によって形成された複合扇状地の扇端に立地している。中央道長野線建設に伴う発掘調査として、昭和60年8月より61年10月まで2か年にわたり調査がおこなわれた。43,000㎡強の調査区は、従来、分布調査等から知られていた本遺跡の西端部にあたるとともに、島立条里遺跡の北端部にかかっている。また南は北栗遺跡に隣接する。調査は遺跡の歴史的環境をふまえ、条里遺構の存否、その形成過程、集落址との関連といったことに主眼をおきつつ進められた。その結果、竪穴住居址176軒、掘立柱建物址81棟、柵列10、畝址3、土壇3,000余基のほか、水田址の可能性のある地点3を確認している。現在、整理作業を開始したばかりで遺跡の輪郭さえ描きえない状態であるが、発掘時の所見をもとに、古墳時代末・奈良時代、平安時代、中世

に分けて、今後の課題を含めつつ述べてみたい。

古墳時代末・奈良時代の住居址は散在的に分布し調査軒数もごくわずかであった。奈良時代には大型の建物址も構築されはじめている。

平安時代に入ると、前代の状況は一変し、検出遺構数は激増する。住居址は河川堆積物に由来する微高地に立地するようになり、自然流路・溝渠等によって区画された内部に東西・南北方向を意識して構築されており、当時なんらかの規制のあったことがうかがわれる。住居址群の周囲には畠址や十数基を単位とする土壌群が展開する地点もあり、集落景観を復元する手がかかりとなるだろう。さらに今後、遺構の時期決定、遺構間の有機的な関係を考察しつつその変遷を解明してゆかなければならない。該期の遺構分布については、中央道が県道仁科線、市道久保川線を横断する付近で、礎石をもつ大型竪穴住居址を含め、特に多数の遺構の集中がみられた。今年度並行しておこなわれた松本市教育委員会による調査成果もあわせ、遺跡の中核部といった問題も考慮されなければならない。こうした遺構の分布も、平安時代後期をもって途絶してしまう。

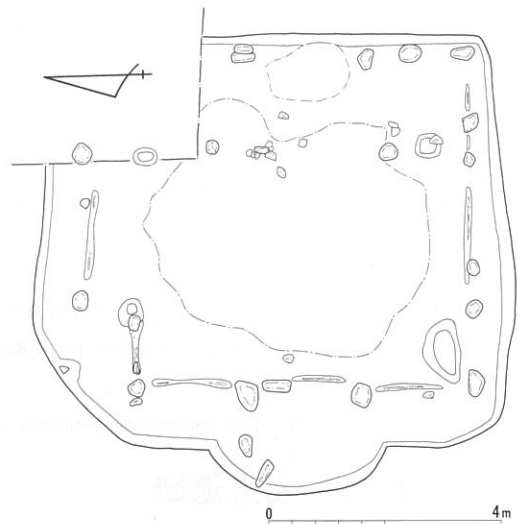
中世の遺構として特記されるのは、仁科線沿いに展開する土壌群である。その数は800基におよび、出土遺物等から鎌倉時代から室町時代前期にかけての墓域と考えられる。これとはやや離れた地点で畠址や建物址も確認している。

水田址については、当初プラント・オパール分析により予測されていたところであったが、今回の調査では、中世の遺構検出面上で明確な遺構ではないが、水田址の可能性のある部分を3地点で確認するとどまった。こうした状況を現条里景観とからめ、どのように評価するのも大きな課題である。

個々の遺構の中で特筆されるのは、先述した礎石をもつ大型竪穴住居址の存在である(図)。東西7m、南北8.3mの規模をなし、西壁中央に張り出し部を有している。礎石はカマド石の転用による扁平な花崗岩の巨礫を用いており、ほぼ1.8m間隔で対辺対称となるように配置されている。礎石間には浅い溝状の遺構が走り、一部に「地覆木」と思われる木質片が検出されている。東壁にカマドを設けており、その前面にも礎石の配列が認められる。本址からは9世紀後半から10世紀にかけての遺物が出土している。

遺物については、新聞紙上にも広く紹介された、女性裸像を焼成前に線刻した須恵器片が住居址の覆土中から出土した。9世紀前半に製作されたものと考えられるが、県下はもとより全国的にも珍しく、その性格

が注目されるところである。



三の宮遺跡の礎石をもつ大型竪穴住居址

松本市 きたなか 北中遺跡

調査研究員 竹内 稔

北中遺跡は、松本市島内北中地籍に所在する。中央自動車道長野線の建設に伴う発掘調査として、昭和61年9月中旬より12月初旬まで11,865㎡の調査を行った。一部は来年度に持ちこされる。

今回の調査によって1辺3～4mの方形竪穴状遺構が6基、石棺状遺構1基、焼土・骨片を伴う墓址7基、掘立柱建物址・柵列・溝渠各1、水田址、土壌多数を検出した。遺構の分布は、調査区南端大日堂付近に竪穴状遺構・土壌群が集中し、北端に水田址の広がりが認められる。遺物の主体は、中・近世陶器、内耳土器、北宋銭で不定形の土壌から完形の燈明皿や仏具と考えられる一括資料が出土した点が特記される。遺構構築時期は、およそ中世末から近代までといえよう。遺構の集中域が南端に偏るのは、大日堂周辺の基盤礫が高く、相対的に安定していたためと考えている。

遺構の性格づけについては、今後細かな検討が必要とされるが、竪穴状遺構については、ほぼ方形に配置され、覆土中に灰・炭層を伴うものが多いこと、1基は掘り方内に方形の石積み囲いを持ち、全般に貨幣の出土が多いことなどが性格づけの観点になるであろう。周囲にはやや規模の小さな方形土壌や径平均1mの円形土壌が分布する。墓域的性格の強いものもあるため、それらとの関連も考慮に入れたい。

石棺状遺構については、遺物がないため時期を特定

できないが、しっかりした石組みを持つ好資料である。

調査区北端では、中世面と考えられる溶脱した土層中に幅1 m程の畦畔がL字状に検出された。プラント・オパールの分析を行うためサンプルを採取したが、分析結果はまだ出ていない。水田とすれば、北に隣接する北方遺跡との関連を考慮する位置にある。

調査区中央部では数本の自然流が南西より入り込む状況が観察でき、立地的には不安定な部分であったと考えられる。

遺跡の位置づけや形成過程については、北方遺跡との関連も考慮に入れながら整理事業の進展の中で見極めていきたい。

きたがた 松本市 北方遺跡

調査研究員 上田 典男

北方遺跡は松本市島内北方地籍に所在する。旧梓川によって形成された中洲性微高地上に立地し、島内遺跡群の一つとして知られている。昭和59年には松本市教育委員会によって発掘調査がなされ、本遺跡が平安時代後半から中世にまで及ぶ遺跡であることが明らかになった。今回の調査は中央自動車道長野線建設に伴う発掘調査で、その調査区は松本市が調査した部分のすぐ西側にあたる。調査対象面積は21,640㎡である。

7月7日から、遺跡の時期、土層の堆積状況、遺構の検出面、面的調査の範囲等を把握するべく、確認調

査が行われた。その結果、遺物の集中がみられた箇所は僅かに1ヶ所、他のほとんどは礫層の上に耕作土がのっているという状況であった。確認のために一部を面的に広げたところ、住居址や柱穴と思われる落ち込みが多数検出された。また、礫層は一定の方向性、(南西―北東)をもって幾筋も堆積していることが確認された。沖積地の遺跡の確認調査がいかに困難であるかをあらためて認識した次第である。

本格的な調査は、確認調査の所見及び松本市の調査成果をもとに、1)古代集落の構造を復元する 2)古代と中世の差異を明確にする、といった大きな目的のもとに、7月21日より11月21日まで行われた。

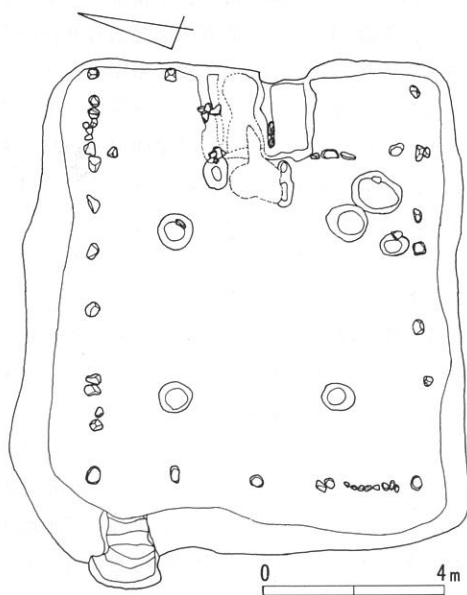
検出された遺構は、平安時代に属するものとして竪穴住居址32軒、掘立柱建物址2棟、溝1基、多数の土壇・ピットの他に鍛冶址と思われる遺構や水田の可能性の強い部分などがある。中世に属する遺構では竪穴状遺構6基、掘立柱建物址8棟、溝5、柵列1、火葬墓9基、多数の土壇・ピットの他に水田址がある。

遺構の在り方では、平安時代の遺構が一定の範囲に集中するという特徴がみられる。特に住居址は4軒重複しているものもあり、集中の度合いが高いといえる。また、住居址群は大きな円で捉えられるのではなく、長楕円形で捉えることができ、それは梓川に平行するような形をとっているのが看取される。中世になると、遺構の分布が比較的散漫となるが、同種の遺構が群を形成しているのが窺える。特に火葬墓群の存在する調査区南部は墓域として理解されるだろう。

これら多くの遺構の中で、特筆すべきは平安時代後半の大型住居址(図・SB15)である。以下、その構造について概略を紹介することにする。

SB15は、東西9.8 m、南北8.4 mを測り、本遺跡で検出された住居址の中で最大規模のものである。壁際にはほぼ等間隔に礎石と思われる石が配されているのが大きな特徴で、住居址中央部には4本の主柱穴が方形に穿たれている。また、竪穴を掘る際に地山(礫層)を一部掘り残し、カマド煙道部として利用しているため、カマドは屋内に張り出す形となっている。カマドは、袖石の抜き取り痕や煙道部に石が配されていることから、石組のカマドであったと考えられる。また、住居址北西隅の張り出しは出入口部の施設であったことが予想される。以上のように、住居址の構造上、他の住居址とは全く異った特異な存在であり、住居址の規模も含めて、集落の中心的役割を果たした存在であったことが容易に想起される。

検出された遺物は、平安時代では、内面黒色土器が



・北方遺跡礎石をもつ大型住居址 (SB15)

主体を占め、灰釉陶器、須恵器、土師器がある。また、鉄製品及び鉄滓が多いのも本遺跡の特徴の一つである。中世では、中世陶器、内耳土器の他、土壌から漆器、火葬墓を中心として古銭（主に北宋銭）の出土がある。

以上が、北方遺跡の概略である。現在、本格的な資料整理に入る前の準備段階であり、多くを語れない状況である。S B 15の取り扱いや遺構の時期など多くの課題が今後に残されている。また、我々の調査とほぼ併行して、松本市教育委員会が、調査区のすぐ西側を調査している。この点も踏まえ、北方遺跡全体について目を向け、資料整理・分析の進展が期待されるところである。

豊科町 上手木戸遺跡

調査研究員 竹内 稔

上手木戸遺跡は、南安曇郡豊科町高家地籍北部に所在する。中央自動車道長野線建設に伴い、約1か月間3,200mを発掘調査した。

昭和61年3月に行った試掘を伴う範囲確認調査では、調査区にかかる段丘上下に全長800mに及ぶ5本のトレンチを入れ、包含層や遺構の存在状況を確認した。その結果、県道以南の地区では焼土を伴う落ち込みが見られたが、県道以北では遺構・包含層は認められず、開発時期も明治以降であることが確認できた。

確認調査の所見に従い面的調査は県道以南にしほり、8月初旬より約2,000㎡を約1か月間に亘って行った。

調査の結果内耳土器を伴う堅穴状遺構が4棟、掘立柱建物址1棟、溝址3、畠址1、土壌等多数が検出された。東辺を寺所堰が巡る半月形の調査区中、南端に堅穴状遺構が切り合って存在し、周囲に柱穴と考えられる小ピットがとりまきように検出された。その西・南縁には多数の土壌が存在し、中央部と区画するように段丘崖下へ向かって幅2mの溝址が確認された。堅穴状遺構中や溝址下部より新しい様相を持つ内耳土器が出土していることから中世末頃の遺構群と考えられる。

調査区北半には、南より掘立柱建物址、西から東へ走る溝址、5列の畝間が観察される畠址等が検出された。近世の遺物が認められることから、南端の遺構群より新しい時期の所産であろうが、整理作業を待つて詳細な検討を加えたい。

本遺跡は当初相当広範囲にわたるのではないかと予想されていたが、確認調査及び本調査においても、遺跡中心部からはずれることが判明した。より南西部へ広がる段丘上の安定した地域が中心となるのではないか。

佐久市 栗毛坂遺跡群

調査研究員 白田 武正

遺跡は、佐久市岩村田市街地の北方1kmに位置し、浅間山火山灰流層を基盤とする田切地形の発達した水田地帯に所在する。

発掘調査は、関越自動車道上越線の建設に伴う県内最初の調査として、昭和61年10月6日から12月26日まで、調査面積6,000㎡を対象に実施された。

これまでの分布調査の結果からは、弥生時代から中世にかけての集落址が濃密に重複するものと予想されていたが、発掘の結果は、比較的遺構の分布密度が薄く、平安時代9世紀後半頃に位置づけられる堅穴住居址5軒と掘立柱建物址7棟、各時期にわたる土壌と溝（暗渠群を含む）が多数検出された。住居址と建物址については切合関係が認められず、配置等から考えてほぼ同時期に存在していたものと推定される。

遺物は、遺構に伴うものとして、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器や鎌等の鉄製品のほか、後世の開田により二次堆積した包含層から、弥生時代後期土器片、中世輸入陶磁器、近世陶磁器、古銭等が出土した。

また、発掘調査と併行して行われた同遺跡内の確認調査（面積1,200㎡）では、遺跡地東端を流れる湯川段丘面から、縄文時代前期の遺物や古墳時代前期の堅穴住居址の一部が検出されるなど、これからの調査に大きな関心をもたらし結果が得られた。

なお、本遺跡に隣接する箇所では、今後、地元佐久市教育委員会や佐久埋蔵文化財調査センターの手によって高速道関連の発掘調査が実施される見込みであり、これら諸機関との連携も十分とりながら、いよいよ4月から本格化する発掘調査に期待したい。



佐久市岩村田市栗毛坂遺跡群の発掘風景

奈文研研修報告

遺物・遺構取り上げ法課程

調査研究員 宇賀神 誠司

本課程は、遺物処理研究室長沢田正昭氏を担当として10月13日～16日の4日間実施された。発掘調査で出土する遺物には、腐蝕したり脆弱化しているために取り上げ困難なものがあり、また、発掘した遺構を現場で保存できなき場合も少なくない。ここでは、最近飛躍的進歩を遂げているこうしたものの取り上げ技術を学んできた。さらに、取り上げられた遺物・遺構は、しばしば効果的な展示品になり得ることから、展示目的に応じた整形・加工技術についてもあわせて行われた。具体的には、液体窒素（沸点-196℃）を利用する凍結工法、様々な薬品類を利用した脆弱遺物の取り上げ法、ウレタンフォームを利用する住居址の転写法、炉・カマドの切り取り工法及びその加工法等である。いずれも、より簡便に、より軽く、より取り上げ後の室内処理をしやすくを重視したものであった。

短期間の研修ではあったが、ある程度の薬品類の知識さえあれば、それらを応用してどんなものでも取り上げられるという自信がついたように思える。不十分な知識と時間的制約から、脆弱遺物や展示を目的とした遺構の取り上げは、とかく切り捨てられがちであるが、実は単純な作業で可能なことを理解した。また、出土状態を変化させることなく移動できるといった利点は、時間的制約から調査期間中に成し得なかったことを、室内搬入後の再調査で補うことを可能にし、一方では時間をかけて精査することによって、屋外調査

以上の成果を期待できることも多いであろう。今後、積極的に活用すべき調査技術であろう。

遺跡測量課程

調査研究員 井上 城典

去る9月4日から9月29日までの約4週間、奈文研遺跡測量課程の研修に参加する機会を与えられた。研修は、遺跡の測量基準点を設定するトラバース測量の理論と実習、測量機器の点検と調整法、航空写真測量外注の手順、遺構の測量実習として墳丘測量という内容であった。前半のトラバース測量では、平城宮跡内に於いて全長1kmにわたる間を三角点よりトラバースし、しかも高い精度を要求され、10日にわたって実測・計算がくりかえされた。その中で特に、鋼巻尺の距離測定では温度による誤差が驚くほど大きいこと（50m、温度35℃で9mmの補正値がでる）、水平角の測定では対回法により精度を高めることができること等知り得た。また、測量機器の点検・調整法では、現場で容易におこなえるオートレベル、トランシットの点検・調整法を学ぶことができた。後半は、前方後円墳である瓢箪山古墳で前半のトラバース測量を応用し、図根点を設定、コンター図の作成をおこなった。普段接することのない遺構であり、測量の手順だけでなく、古墳の見方・表現の方法など学習する機会にもなり貴重な体験となった。

測量というと難解な数式や計算があるというイメージがあり不安な気持ちで参加したが、各先生方のていねいな御指導をうけることができ、無事研修を終了することができた。

埋文センター日誌抄（昭和61年10月～12月）

10月31日 松本市島内北方遺跡発掘終了式
11月1日 愛知県久永春男氏他3名来所
" 5日 塩尻市吉田向井遺跡残り部分発掘開始
" 10日 愛知埋文センター丹羽・池本氏来所
" 12日 関東甲信越静文化財行政担当者会（13日まで伊豆長岡市 2名出席）
" 13日 松本市島立三の宮遺跡発掘終了式
" 17日 三重県文化課山田猛氏他3名来所
" 19日 埼玉県埋文事業団町田勝義常務理事他1名来所
" 20日 来年度調査予定の豊科町以北につき初の調整会議を豊科公団事務所で開催（明科地区）
" 21日 同（麻績・坂井地区）
群馬県埋文事業団原雅信氏他3名来所
" 22日 国学院大学小林達雄教授他2名来所
" 25日 国分寺市教委広瀬昭弘氏来所

10月28日 松本市島立北栗遺跡発掘終了式
" 29日 佐久調査事務所新設なり開所式
" 中信地区高校社会科部会教員14名来所
12月2日 塩尻松本インター間遺跡発掘調査完了式
" 3日 松本市島内北中遺跡現場徹収、松本地区全遺跡現場作業終了
" 4日 明科地区調整会議（豊科公団）
" 9日 佐久市岩村田地区確認調査（12日まで）
" 11日 関プロ埋文行政研修会議（於茨城県鹿島町、12日まで 3名出席）
" 16日 東筑摩郡明科町・四賀村ルート内遺跡踏査
" 17日 同麻績村 坂井村踏査
佐久調査事務所入所式
" 18日 佐久地区ルート内各遺跡踏査（20日まで）
長野県史刊行会笹沢浩氏来所
" 22日 佐久地区初の調整会議開催
" 25日 林茂樹・森嶋稔理事佐久地区調査状況視察
" 26日 佐久市岩村田地区栗毛坂遺跡群発掘終了